# 与謝野寛と朝鮮王妃暗殺事件

加藤孝男

## 一、詩歌集『東西南北』と朝鮮

韓山（からやま）に、秋かぜ立つや、太刀なでて、
　　われ思ふこと、無きにしもあらず。

この歌は、与謝野寛（鉄幹）の代表作である。韓山は、韓国（以下「朝鮮」と記す）の山で、当時、寛が滞在していた京城（以下ソウルと記す）にある山のことであろうか。その山に秋風が、吹きはじめたのかという。

句読点があるのも珍しいが、詩歌集『東西南北』（明治二九年、明治書院）では、和歌はすべて二行書きとなっている。行がえをすることによって、〈われ思ふ〉以下が強調されているのだともいえる。思うことがないわけではないと、文体は屈折している。寛は、日本刀をなでながら、何を思ったのか。その〈思ふこと〉の内容を考察していきたい。

ところで、この歌には、詞書きがある。

〈京城に秋立つ日、槐園と共に賦す。時に。王妃閔氏の専横、日に加はり、日本党の勢力、頓に地に墜つ〉というもので、政治的な危機意識にかかわるものであった。

寛は、立秋のソウルにあって、槐園（鮎貝房之進）とともに、詩歌をつくり、やるせない思いを晴らしている。『東西南北』という詩歌集は、こうした明治二十年代後半の朝鮮情勢を背景にしていた。一八九五（明治二八）年十月八日に、朝鮮王妃閔妃が暗殺されたことを思うと、立秋の意味は重く感じられる。

寛が、鮎貝房之進に誘われ、ソウルへ赴いたのは、明治二八年四月のことであった。房之進は、寛の歌の師匠である落合直文の弟にあたり、寛とは肝胆相照らす仲であった。寛の自筆年譜（『与謝野寛短歌全集』、昭和八年、明治書院）にも、詳しく記されている。

〈四月「二六新報」を辞し、韓国政府学部省乙未義塾の教師に赴任し、その分校の一たる桂洞学堂を主管す。同僚に熊本県人松村龍起あり。乙未義塾は去年渡韓せる落合先生の令弟鮎貝房之進君が総長として経営せるものなり。〉

ここにいう村松龍起（辰喜）は、熊本県阿蘇郡の人で、寛と同じく桂洞学堂を任されていた。中晧は、『与謝野鉄幹』（桜楓社）のなかで、松村が後に熊本市議会議員、国立公園中央審議会委員などを歴任し、活躍したと記している。『東西南北』にも、この松村の名前が登場する。

〈京城にありて、肥後の松村鉄嶺と賦す〉というのがそれで、

　　もろともに、世には男子（をのこ）と、生れずば、
　　かかる涙も、濺がじものを。

と詠っている。互いに男でなかったら、こんな悔し涙を流さなくてもいいのにという意味である。松村も、後に詳しく述べる閔妃暗殺事件に連座した。事件後、強制帰国させられ、広島で取り調べを受けている。この人物を介して、寛は熊本国権党の人たちと親しく交わり、やはり容疑者として取り調べを受けることになる。

また、槐園（房之進）は、東京外国語学校の朝鮮語科を卒業し、日清戦争開戦直前（一八九四年）に朝鮮に渡っている。当時、ソウルの日本公使館や釜山の領事館にいた朝鮮語科の親友、国分象太郎、大木安之助、塩川一太郎らとの縁によって、朝鮮での学校経営を任されたという。（稲葉継雄、『旧韓国の教育と日本人』、九州大学出版会）

日清戦争で、日本の勝利が決定的となると、日本語熱がたかまった。官立の日本語学校だけでは手薄となり、それを補充する形で、乙未義塾が設立された。これは、玄采（外務衙門主事）という人物が設立した私立学校であったが、朝鮮政府が費用のほとんど負担していたという。本校、分校を合わせ、七校あったといわれる。

ところが、日清戦争に勝利した日本は、下関条約に調印し、その直後、ロシア、フランス、ドイツなどの圧力によって、遼東半島を清に返還しなければならなくなった。いわゆる三国干渉である。朝鮮国内においても、ロシアの勢力が次第に強まり、李王朝は、日本に背を向けて、ロシアに接近しつつあったのである。

当時の朝鮮は、李氏二六代高宗の時代であった。殊に、高宗の妃となった閔妃の発言力が次第に増して、閔妃の一族が高位に登った。この閔妃が、ロシアに急接近したことによって、日本側が憂慮する事態となっていた。詞書きに言う〈王妃閔氏の専横、日に加はり、日本党の勢力、頓に地に墜つ〉という状況である。

王である高宗が幼かった時代には、その父である大院君が権力をほしいままにしたが、閔妃が王妃となると、状況は逆転した。義父である大院君を蟄居させ、政治に大きく介入したのである。いわば、高宗の父とその妃とのふたりの確執が、朝鮮の政局を、動かしていたといえる。そのような中で、政局の外におかれていた大院君を、ふたたび、政治の中心に戻し、反日的気運を払拭しようとするクーデターが練られていた。

一八九五年（明治二八年）九月、朝鮮国駐箚特命全権公使として、三浦梧楼が着任すると、閔妃暗殺計画が実行に移された。これについては、角田房子の『閔妃暗殺　朝鮮王朝末期の国母』（新潮社）や、木村幹『高宗・閔妃』（ミネルヴァ書房）などに、詳しい経緯がしるされている。

明治二八年十月八日未明、三浦梧楼が指揮する京城守備隊や訓練隊、さらに〈壮士〉とよばれる民間の集団が、大院君と共に宮城に入り、クーデターを実行した。その時に壮士らによって閔妃は殺害されたといわれる。

ここにいう壮士らとは、主に朝鮮在住の日本人で、殊に過激な思想の持ち主達である。安達謙蔵はその中心人物であった。安達は、後に国務大臣にまでなったが、当時は、外務省機密費によって、ソウルで新聞事業を営み、近代化への啓蒙活動を行っていた。この場合の近代化とは、つまるところ、朝鮮の日本化に他ならなかった。

安達によって、ソウルで創刊された「漢城新報」は、朝鮮語と日本語と両方で書かれた新聞で、こうしたジャーナリズムをつかって、日本は、朝鮮の近代化を進めようとしていた。

この新聞社の社員らが閔妃暗殺の中心人物であった。その人脈については、『安達謙蔵自叙伝』（昭和三五年、新樹社）のなかで、安達自身が詳しく語っている。〈当時漢城新報社には、予の外に主筆国友重章、編集長小早川秀雄、記者佐々木正、会計牛島英雄君あり、又客員として平山岩彦、松村辰喜の両君あり、また職工らの多くは熊本県人なれば、恰も熊本同志の梁山伯たる観があった〉という。安達の人脈によって、熊本県人らが集められたことが分かる。

安達は、熊本国権党の佐々友房の濟々黌に学び、友房に従って、明治二十六年に朝鮮にわたった。これは当時の朝鮮情勢を探ることが目的であったといわれる。さらに、謙蔵は、日本が清に宣戦布告する直前の二十七年六月に、九州日日新聞（友房が社長）の特派従軍記者として、日清戦争を取材した。

こうした経歴によって、安達は、朝鮮での新聞経営を任されることになる。

佐々博雄の「熊本国権党と朝鮮における新聞事業」（「国士舘大学文学部人文学会紀要」、昭和五九年一月）によれば、「漢城新報」は、外務省の機密費千二百円によって創刊され、外務省の機関誌的な役割をしたという。

さらに熊本国権党について、その淵源を明治十二年まで遡り、西南戦争によって荒廃した教育を立て直すために設立された同心学舎という教育機関がもとになっているという。その建設趣旨書に〈皇威の尊厳を益し、我が国権の拡張を謀らむとす〉と記され、その考え方が窺われる。

この同心学舎は、謙蔵が学んだ濟々黌の前身であり、紫溟会という組織の教育機関であった。ここで早くから中国語、朝鮮語を学科に取り入れ、日本、中国、朝鮮の三国連合を説いていたという。しかしそのような考え方も、〈アジアの状況変化を背景として変化し、朝鮮における新聞事業でも明らかなように、政府の対韓政策と一体化し、さらに急進化した〉と結論づけている。それは日韓併合へと進んでいく国家の意思のようなものを、彼らが代表したのだともいえる。

時は下り、二〇〇五年五月、閔妃暗殺に関わったとされる日本人（家入嘉吉、国友重章）の子孫が、閔妃の陵墓を訪れ、謝罪する場面が、メディアなどでも取り上げられている。この問題は、日韓交流の喉もとに刺さった棘ともいわれながら、いまだ闇に覆われた部分が多く存在する。

## 二、閔妃暗殺と与謝野寛

さて、与謝野寛は、この事件にどのように関わったのか。日本側は、この事件に関与したとする四八名を、強制帰国させて、広島で尋問をおこなった。しかし、いずれも証拠不十分を理由に、全員を免訴し、釈放している。（注）。被告たちは、罪人というよりも、凱旋兵士のごとく日本に迎えられたという。

そのあたりを、逸見久美は『評伝与謝野寛晶子　明治篇』（八木書店）において、やはり事件にかかわった菊池謙譲の『近代朝鮮史』（大陸研究社）を引用する。

〈当時、乙未事変にたいする日本国民の同情は絶大深甚であった。彼等被告が。宇品埠頭に現はるや各地より集合した歓迎者は沿路堵列をなし、被告一行に甚大なる同情と熱情的な歓迎を表し、一時は広島獄事のためにその見舞い訪問者が全市客館に充満し、恰かも凱旋軍を迎ふるの光景であった〉として、この後、逸見は、〈乙未事変を英雄視していた日本国民の感情は『東西南北』にも反映しているようである〉と記している。

寛の自筆年譜によると、〈十月朝鮮王妃閔氏殂落事件あり、この前後に亘り、堀口九萬一・鮎貝房之進両君等と画策する所あり。偶ま鮎貝君と木浦に遊びたる間に、予期に先だつて王妃事件起り、寛は一日後に京城に帰れるを以て王宮に入らず。次いで公使館一等書記官杉村濬、副領事堀口九萬一等外数十人と広島に護送せられたるも、予審判事は取り調べの上に寛を免除せり〉と記す。

堀口九萬一は、外交官で、フランス文学者堀口大学の父である。寛が公使館に寄寓していた関係で、親しくなり、おそらく文芸上の交わりのあった人である。後に寛の弟子ともなった大学は、父が閔妃暗殺にかかわったことを一家の恥と考えたらしい。前掲書で角田は、大学

が関連資料をすべて消却処分にしたようだと記しているが、真実は分からない。

堀口と鮎貝との画策については後に触れるが、寛は早々に嫌疑がはれると、他の容疑者への差し入れなどをして、すぐに朝鮮へ戻っている。

この事件に寛が関わったことを裏付ける資料として、永岡健右は、『与謝野鉄幹伝』の中で、「日韓外交史料第五巻」の「一五五番」、〈電信明治二十八年十月二十七日午後三時発十時着西園寺大臣仁川橋口領事　杉村書記官同ジク従者浅田儀一郎堀口領事官同ジク従者ヨサノカン荻原警部石塚法制局長及ヒ巡査成相渡辺横尾白木木脇境小田ノ七名ハ御用船住江丸ニテ本日午前十一時宇品ヘ向ケ出帆シタリ〉という箇所をあげる。

このなかで、永岡が着目するのは、「ヨサノカン」（与謝野寛）とならび、浅田儀一郎の名がみられることで、浅田は、寛の内縁の妻、浅田サタの父、義一郎であるという。

寛がサタを内縁の妻として、東京で生活をはじめるのは、明治三十年代に入ってからと考えられている。その義父、義一郎と寛は、この時点で親交があったらしい。それは、寛が、山口県の徳山にいた頃に、兄の寺の檀家の総代で資産家の義一郎を知り、後に朝鮮での事業をすすめたのではないかとみている。

房之進などによれば、三人で木浦へ行き、将来値上がりするであろう土地をいろいろ物色していたという。この時代の朝鮮は、事業などで一攫千金をねらうものたちが多く、鮎貝房之進も、乙未義塾が閉鎖されると、朝鮮において、京釜鉄道敷設請負などの事業によって財を成し、その資金で、朝鮮文化を研究し、『雑攷』（全九輯）などの著作を執筆した。（落合亮、気仙沼ユネスコ協会編『日韓文化かけ橋の先人　鮎貝房之進』、気仙沼市教育委員会）

寛は、こうした自筆年譜の記事とは別に、「明星」（大正一三年十月）に連載した、「沙上の言葉」（四）のなかで、このころを詳しく回想している。

明治二八年七月に寛が腸チフスを患い漢城病院へ入院したとき、見舞いに来た堀口と鮎貝が、枕頭でクーデターの画策をしたという。〈それから両君は韓装をして閉居中の大院君を訪ひ、一回の会見で或る密約が出来、それから堀口君が三浦公使を説いた〉と記す。堀口と鮎貝が大院君に会いに行き、筆談によって、決起を促したとされるが、その筆談内容なども残されておらず、これが三浦公使のクーデター計画とどう結びつくかはあきらかではない。

当時、房之進は、四月に開校した乙未義塾の経営に行き詰まっていた。一八九五（明治二八）年九月七日の〈小学校令〉が公布されると、乙未義塾の分校の多くが官立小学校に改変を余儀なくされた。（『旧韓国の教育と日本人』）。こうした政策などに憤った房之進と寛が、クーデターの計画に共鳴していったであろうことは想像がつく。日本公使館を取り巻く空気は、そこに寄宿する二人にも、暗黙の了解として伝わっていたに違いない。また、寛は、房之進と、事件のときに木浦に行っていたというが、これが先に記した義一郎と一緒であったかどうかは分からない。

このように考えてみると〈韓山（からやま）に、秋かぜ立つや、太刀なでて、／われ思ふこと、無きにしもあらず。〉と寛が詠んだ〈われ思ふこと〉の意味が推察されよう。

『東西南北』が出版された時点（明治二九年七月）で、こうした状況に多くの日本人が関心をもっていたとみることができよう。閔妃事件以降、朝鮮では、反日感情が高まり、国王高宗は、ふたたびロシアに傾き、ついに宮殿からロシア公使館に移ってしまう。政局は、日本にとって不利な状況となり、金弘集らの親日派内閣の大臣らが殺害され、ロシア寄りの新たな政権が誕生した。日清戦争以降に日本の行ってきた対朝鮮政策が、この時点で破綻したことを意味する。

このような情勢に対して、寛は、『東西南北』のなかで、〈あゝ今や、二月十一日の変あり。之を十月八日の事に比して、今昔の感、果して如何。相逢て相抱き、共に泣下るもの、知る人ぞ知らむ〉として、

ことわりは、知れど涙は、せきあへず。
泣くも浮世の、ならひとや見む。

と詠んでいる。広島で取り調べを受け、ふたたび朝鮮へ戻った寛は、姿を隠していた房之進と再会して、二人で涙を流したという。だが、房之進はなぜ姿を隠さねばならなかったのか。

中晧は『与謝野鉄幹』で、「国民之友第二百六十七号」の〈我守備隊の一部及壮士等（此内には新聞記者あり医師あり商売あり）が孔徳里なる大院君の別邸に向へる時大院君より途に出されたる鮎貝なる者門扉を開きて迎へ入れんとしたるも深夜のことなれば堅く鎖され且予て王后より付け置かれたる巡検の警護し居るを以て容易に入るべくもあらず是に於て我巡査両三名は鮎貝を肩に懸けて但ある窓を破りて内に進入し忽ち巡検を捕へて拘禁したれば門は内より開かれ一同徐かに進み入り云々〉という記事を引用し、〈槐園は何らかの形で機密に関係していたような印象が深い〉と述べている。あるいは、房之進は、寛と木浦へ行かず、ソウルに残って、事変に関係していたのではないだろうか。クーデターの日時を、大使館に寄寓していた二人が知らなかったというのも、変な話であるし、それもソウルから遠い木浦へこの時期旅行する必然性もみえてこないのだ。

〈二月十一日の変〉以降、寛は、日本の状況挽回をねらって、ふたたび朝鮮にあって策謀を巡らしたことが、前掲「沙上の言葉（四）」に記されている。〈領事館の大木君も自分を種種の機密に役立てるために呼返したのであつたが、自分は大木君に隠して或る計画を為すための少数の同士を集めた。それは皇帝が近く露国公使館の付近にある明禮宮へ移ると云ふ噂があつたから、宮の付近に火を放ち、再び皇帝が露国公使館へ避難されようとする所を奪つて日本公使館へ送り届けようと云ふ計画であつた〉という。

大木は、当時、一等書記生の大木安之助で、日韓併合後には知事となった人である。寛は、ロシア公使館にいる高宗とその皇子を奪回する計画をたて、これを少数の民間の有志だけで決行しようとしていたらしい。ところが、高宗はなかなかロシア公使館を動かず、計画は実行されずに終わった。

寛は、後にみずからを振り返り、〈自分と云ふ小さなドン、キホオテは柄に無く一かどの志士気取で居た〉（「沙上の言葉」）と述べたが、国家有用の人材になることを第一義と考えたこの時代の人々は、寛のこうした行動にも理解をしめしたのではなかろうか。同じく、和歌革新の立役者である正岡子規も、病をおして日清戦争に従軍した。日本人の想像力は、もはや大陸抜きでは考えられないところまできていたのである。

日本はこの後、大国ロシアと戦争をすることで、朝鮮の支配権を獲得するが、そうした大陸への想像力や野心がどのような形で形成されていったのかを考えてみる必要があるのだ。

## 三、和歌革新運動と朝鮮

与謝野寛が、朝鮮に渡ったのは、親友の鮎貝房之進に誘われたというのが、みずからも記す動機ではあるが、本当にそれだけのことであったのか。

『東西南北』のなかに、〈廿七年六月、日韓の事、益々迫りぬ。余、同人四五輩と謀り、将に京城に赴かむとし、旅装ほぼ整ふ。たまたま、海外旅行券を、官衙に請ふに及んで、余の兵籍、なほ予備に在り。遠く遊ぶを、許されず。しかも、予備兵の召集せられむは、何れの日にあるかを、知らざる也〉と記され、次の歌が掲げられている。

千里（ちさと）ゆく、こころばかりは、はやれども、

ほだしはなれぬ、駒の身にして。

朝鮮へ行きたいという気持ちははやるが、繋がれた馬のような身分であると嘆く。寛には予備の兵役が残っていて、いつ戦争に召集されるかわからない状況であった。明治二七年六月といえば、日清戦争開戦直前である。「二六新報」の記者であった寛は、徴兵を逃れるためにも、すぐに従軍したいと考えたのではなかったか。

〈麗水君や子規君の従軍が窃に羨しかつた。それで戦争を題目にした詩や歌を自分の新聞に載せて慰めてゐた〉という。麗水とは、遅塚麗水で、「郵便報知新聞」の記者として従軍した。また、正岡子規も、「新聞日本」の記者として従軍したのであった。

当時、「二六新報」で、寛は第一面を担当し、詩歌を自由に掲載できる立場にあった。当時の「二六新報」の紙面をみるとそのことが分かる。

明治二七年八月四日の「二六新報」には、〈朕茲ニ清国ニ対シテ戦ヲ宣ス〉という「宣戦の大詔」が掲載された。この同じ第一面に、寛の「宣戦令の出でたる日つつしみて詠める」という和歌八首も載せられている。

えみし討つ詔勅（みことのり）は出でぬ大地（おほつち）も
　てる日に裂くる水無月（みなづき）の空

以下、天皇の詔勅に感激したものである。また、八月二三日の紙面にも、一面に、「懸軍萬里」という新体詩が載り、〈王師西に向うて茲に三月、国民に、何をか告げし吾々は、勝利、勝利、又勝利〉にはじまり、〈とく立てむ、旭の御旗その御旗〉で終わる詩が掲げられている。

こうした作品は、その後も表れ、寛は従軍できぬ憂さを、作品で晴らしていたという。中皓がいうように、「二六新報」の社主、秋山定輔は、日清開戦論者で、天祐侠の活動をも支援したという。天祐侠とは、朝鮮半島から清国の軍隊を追い払うために、活動していた一団であった。釜山に本拠おき、東学党などの指導者にも会って、その考えを説いていた。

「二六新報」の主筆の鈴木天眼や、安達九郎なども天祐侠の中心メンバーといわれ、『東西南北』のなかにも、この天祐侠を詠んだ歌がある。また、『佳人之奇遇』の著者、東海散士（柴四郎）も、閔妃事件に連座するが、当時は「二六新報」の編集局にいた。寛は、こうした人たちの影響によって、国際情勢をみていたと考えることができる。

和歌革新運動が、「二六新報」や、正岡子規の「新聞日本」を舞台に華々しく起こったことは、偶然ではない。これまで花鳥風月を詠うことで充足してきた和歌が、社会情勢（政治・経済）にまで目を向け、そうした状況も詠み込める詩として甦ったといえる。

「二六新報」の第一面には、「社告」として、「和歌募集」の記事が載った。選者は、海上胤平、落合直文、小中村義象、鮎貝槐園、与謝野鉄幹であった。当時は、五七五七七の詩型を〈短歌〉と呼ぶ習慣はまだなく、和歌と呼んだ。明治天皇が和歌を愛好されたことも幸いして、このジャンルがにわかに活性化しだすのである。

むろん、新聞購読者を、和歌によってつなぎとめるという功利的な側面もあったが、それより、漢詩に対抗する和歌というジャンルが、前面に打ち立てられることによって、日本という意識が呼び覚されていったといえる。その背後には、日本人の大陸へのまなざしがあったのである。

## 四、明治の日本人のみた朝鮮

この大陸へのまなざしに関わる読み物として、如囚居士の「朝鮮雑記」は、特筆すべきである。この連載は、一八九四（明治二七）年四月一七日から、六月一六日まで、「二六新報」に連載された。その記述をよむと、当時の日本人が、朝鮮をどのように見ていたか、また見ようとしていたかを知ることができる。第一面に毎回、挿絵付きで掲

載されたので、読者の多くは、そうした関心からも、この記事に着目したに違いない。

次の図は、〈朝鮮美人日本医師に病を診せしむる図、詳しくは昨日の雑誌にあり、其面を掩ふは羞かしければなり〉（附二七年四月二八日）とある。

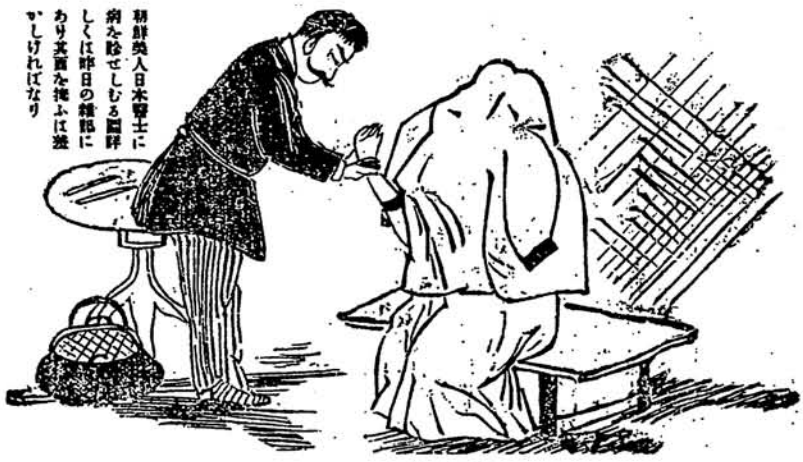


図1

〈彼邦の中流以上の婦女病に罹るも、男医に診察を乞ふことなし、縦令診しむるも顔面を見することを羞ち、戸より手を出して僅に診脈せしむるにすぎず、且つ女医なるものあれど、医といふは名のみにして傷寒論一冊を読みたることもなく、其内質は春を切り売りするを渡世とするものなれば斯る女医のまさかの時の益に立つわけもなく、哀れ彼の邦の婦女たるもの重病に犯さるる時は、見すみす命を棄てざるべからざる有様なり、我邦文明進、婦女の医に志して業を卒へたるもの甚だ多し、若し幸に一濤の海を航して彼の邦に至り此憫むべき病婦を済度しなば、其功徳無量又利益も甚だ多かるべし、我邦人京城に在留して、医を業とするもの三人あれども、皆相応に資産を有し、毎月平均一百五十円を下らずといふ〉と記している。

ドラマ「チャングムの誓い」などでも日本でお馴染みの女医であるが、こうした文章からも、作者の独断と偏見が窺われる。要約すれば、朝鮮では、中流以上の女性は、男医には診せず、女医に診察してもらう風習があるという。その女医は売春まがいのことをしていて、いざというときの役に立たないので、重病のときには命を落としてしまうという。文明の進んだ日本に女医も増え、もし日本の女医が、朝鮮へ行ったなら、資産をなすことであろうと結ぶ。

図2

〈樹上よりブラりと下りたるものを手提げ革嚢と見るは僻目なり。樹下家屋の如きものは死屍を納れ置く小屋にて幅三尺丈五尺余肉融けて白骨となるを俟つなり誤て便所と見る勿れ〉（五月一日）とある。

〈余嘗て慶尚道密陽門外の栗林に於て、三個の死屍つるしありしを見たり〉として、枝に死体を吊す風習があることを伝えている。

このような風習については、見聞と、伝聞とが交錯して、読み物としての面白さに力点がおかれている。そこには、黄海、平安では、死屍を直に土に埋葬し、三南、京畿では、山麓あるいは野外に置いて、丸木でつくった十字架二、三個を並べて、その上に棺を横たえ、藁や筵で覆って、雨露に晒すという。こうした記述の信憑性については、民俗学の成果をも参照にしなければならないが、明治の日本人が朝鮮の風習をどのように見たかという一つのサンプルになっている。

また、結婚についても、次のように記す。

〈彼の邦にて敗俗の最も甚だしきを早婚となす。十二三歳の児童にして既に妻を娶るものあり、而して妻は己れより年長なるを撰むを常とす、十二三才のものにして二十前後の女と結婚するなど彼の邦にありては敢て珍らしきにもあらざるなり、亦奇俗といふへきなり〉と記し、〈稚陰稚陽遂に何事をか為す彼邦人口の年々減少する亦茲に原す〉とくわえている。十二三歳の男子が、二十歳前後の女と結婚することは、珍しくないといい、このため、朝鮮の人口は年々減少していると述べているのだ。

このような事例は挙げればきりがないが、「娼妓」（五月三日）には、〈彼の邦の娼妓は総て人の妻妾なり、人の妻妾にあらざるものは娼妓たるを得ず、而して其夫たるものの衣食は総て資を茲に仰くなり、夫はみずから妻の為に客を曳き、又自ら馬となりて揚代の請求に来る、是彼の社会一般の状態なりとす〉とある。ここにも、特殊な事例を一般化する視点があり、前近代にあった当時の朝鮮社会を読み物風に描こうとする意図がある。

キセルをもった女性は売春婦であるという。朝鮮の売春宿では、酒も茶も饗応せず、ただ煙草をすすめるのみとして、〈宛然たる密売春窩の光景、単に獣欲を洩らさしむるの妖窟たるの過ぎず〉と評している。

また、「男色」（五月四日）についても、〈八道滔々として到る處に男色の流行せらるなく、京城の如きは良家の子弟と雖も、美服を着けて市街を横行し、公然其臀肉を鬻く〉という記述で、やはり特殊な事例の一般化する視点が見られる。

図3

当時の新聞が読み物としての性格をもっていたとはいえ、このような記事が新聞の第一面に掲載され、報道されていたのである。そこには、近代化された日本人が「未開社会」を覗くという構図がみえ、こうした朝鮮に対する観点が、その後の大陸観や政策に、影響を及ぼしていくとみていい。

さて、この「朝鮮雑記」の著者である「如囚居士」は誰であろうか。いま、この記事をまとめた本を、国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で読むことが出来る。荀祥堂という出版社から明治二七

年に出版されたとある。著者は〈足立＊二郎（アダチケイジロウ）〉と記され、＊の部分は不明である。ネットなどの情報では、この本が、近年、ハングルにも訳されたという。そうした記事から著者は、本間久介とされているが、出典は明かではない。

ただ、本間久介という名は、中晧の『与謝野鉄幹』の中に、〈安達九郎（本名本間九助）〉として登場する。名前の文字が違っているが、天祐侠のメンバーであったようだ。むろん、中晧は、「朝鮮雑記」には触れていないが、おそらく、この安達九郎という人物が、如囚居士であろう。逸見の『評伝』には、〈安達謙蔵（九郎）〉とあるが、安達謙蔵と安達九郎とは別人である。「朝鮮雑記」のなかには、東学党のリーダーと会い、筆談する場面が登場する。こうしたことからも、著者が天祐侠のメンバーであることは間違いない。

この安達九郎の名は、明治二七年九月九日の「社告」に表れ、〈日、清、韓事件の起るや我社は前後社員を朝鮮の要所に派し今や通信者を合せて左の如き〉という。そこに〈戦場付近〉として〈鈴木天眼〉と〈安達九郎〉の名がみられる。「二六新報」の社員として、日清戦争に従軍したが、おそらくそれ以前に朝鮮に渡って、政治活動をしていたに違いない。

寛は『東西南北』のなかで、〈天祐侠の一士、安達九郎の、朝鮮に赴くを、送れる歌の中に〉として、

山けはし。駒の足おそし。行手には、
竹の葉そよぎ、虎吼えむとす。

とある。寛との交友があきらかに示されている。おそらく安達から、寛は朝鮮に関する多くのことを聞いていたのであろう。

## 五、ジャーナリズムと教育

安達九郎の「朝鮮雑記」は、朝鮮という国を奇妙に浮き上がらせた著作であったが、こうした記事と並行して、〈鉄幹〉の有名な歌論「亡国の音」は掲載された。この近代短歌史における有名な歌論は、明治二十七年五月十日から、同紙に連載されている。

最初は第三面から連載がはじまり、井上円了の「妖怪談（都内妖怪事件取調承前）」という記事の後におかれている。

この円了の記事も興味深いものだ。トク女という少女の周辺から怪声が聞こえるというので、円了が調査した。すると、それは少女の巧みな腹話術であった。養子先から実家に帰りたい一心で腹話術を使い、周りを不気味がらせていたという。円了は、こうした妖怪事件に、科学的な根拠をあたえて解決している。

これも「朝鮮雑記」などと同趣向で、文明開化は、こうした身辺にあった闇を、電灯で照らすように明らかにしていった。明治においては、こうした不分明の闇の部分が世の中には多く存在した。隣国朝鮮ですら、多くの人の意識には、不可解な国なのであった。

〈鉄幹〉の「亡国の音」は、こうした記事の後からはじまる。その文意は明快で、サブタイトルにあるように「現代の非丈夫的和歌を罵る」というものであった。和歌の大家などの作品を俎上にのせ、それらを、狭小、繊細、卑俗、乱猥などというキーワードで斬っている。そうした和歌の調べが、国を滅ぼす調べであると述べている。

〈廃娼論を為すものあり禁酒論を為すものあり而して一人のいまだ現代和歌排斥論を唱ふる者なきは如何〉という。和歌の時代遅れを指摘した寛のこの論は、円了の妖怪の話や、「朝鮮雑記」の著者らと同じ立脚点に立っていたのである。いわゆる近代化された側から、前近代を批評するという論法であった。

寛の歌論と同時並行して、「朝鮮雑記」の連載はつづいていた。殊に特筆すべきは、五月十六日の記事である。そこには、「日本語学校」の記事が掲載されている。

〈朝鮮政府が日本語学生を養成せん為めに設立せしものにして、京

城日本公使館の前に在り、生徒は僅かに二十余名教師は我邦人一人なり、生徒中には既に日本語に熟し、新聞紙を解読するもの四五名ありといふ、前途多望なりといふべし、而して其日本語学生たるものをして唯我邦の言語を学ぶの鸚鵡たらしむることなく能く我邦語に通ずると共に広く海外の事情に達し、他日朝鮮建国の英雄を以て自ら任ずるの輩を出すに至らば此語学校は其我邦の松下村塾にあらざるなきか〉と述べている。

これは官立の日本語学校のことを言っているのである。こうした日本語学校への期待は、嘘偽りのないものであろう。こうした記事から、日本に留学し、祖国朝鮮でクーデターを起こした金玉均を思わないものはなかったであろう。金は、クーデターに失敗し、日本に長年潜伏したが、たまたま旅行した上海で暗殺された。

日本で学び、朝鮮で近代化を推し進めようとしていた金らに期待を寄せていた分、同紙でも、たびたび死の様子が報じられた。金を暗殺した刺客洪鐘宇は、英雄として閔妃やその一族らに迎えられたという。（「閔族の狂喜」、四月十五日）

ジャーナリズムと教育という二つの方法を用いて、当時の日本は、朝鮮を親日・近代化に導こうとしていた。それゆえ、朝鮮側も、こうしたジャーナリストや日本語学校の動きを極度に警戒していたといえる。

この時代に、ジャーナリズム（新聞・雑誌）と教育とは、国を動かす重要な位置を占めていた。だが、そうしたスローな改変はどこかで破綻し、拙速な力による局面打開策が講じられていった。

詩人与謝野寛は、そうしたジャーナリズムと教育という二つの機関に関わり、ひりひりするよう時代を尖鋭化された言語で描いている。彼は、知らず知らずのうちに時代の突端にまで行き着いていたのであった。こうした時代の先端意識が、その後の彼の文学活動を支えたのであり、その意識は、大陸から、さらにその背後にあるヨーロッパへと移っていった。

（注）明治二九年一月二三日の「時事新報」に「閔妃謀殺事件の予審終結す」「三浦梧楼以下四十八名無罪放免」という見出しで、「予審終結決定書」が掲載されている。

（本学人文学部教授）